



# 椎の木

平成29年12月1日  
朝霞市立朝霞第八小学校  
電話：048-465-8381  
男子547名 女子515名 1,062名

【学校教育目標】 **かしこく・やさしく・たくましく**

## “失敗”にめげない子に ~Part 2~

校長 鈴木 聡

過去2年間の学校だより12月号の題名を調べたところ、27年度「失敗について考える」、28年度「失敗から何度でも立ち上がる!」となっていました。今年は先月に引き続き「失敗にめげない」を取り上げますが、多くの失敗を体験してきた私から、子どもたち・保護者の皆さんへのエールです。

私は、小学校教員になって数年経った頃から、詩「教室はまちがうところだ」を教室の一角に掲示してあります。担任する子どもたちと、私なりにつながろうとしていた頃です。

この詩は、第1連「教室はまちがうところだ/みんなどしどし手をあげて/まちがった意見を言おうじゃないか/まちがった答えを言おうじゃないか/まちがうことをおそれちゃいけない/まちがったものを わらっちゃいけない/まちがった意見をまちがった答えを/ああじゃないか こうじゃないかと/みんなで出しあい言いあうなかでだ/ほんとのものを見つけていくのだ/そうしてみんなで伸びていくのだ」が有名で、年配の教職員なら誰もが知るものです。詩の終末部は、「…/まちがってる/こと/わかればよ」(第12連)、「人が言おうが/言うまいが/おらあ 自分で/あらためる/わからなけりゃあ/そのかわり/だれが言おうと/こづこうと/おらあ根性まげねえだ」(第13連)と続き、「そんな教室 作ろうやあ」と子どもたちに、作者自身に、そして全ての教員に呼び掛けて結ばれます。

この詩には、作者(蒔田晋治氏)の教育の原点が全て示されていると感じます。私は、教室は皆で学ぶ場(他者共生)、間違えや違いを受け入れる場(他者受容)、自らを変容させる場(自己存在、自己肯定)という考え方に共感し魅力を感じ、そんな教室にしたいと願い取り組んでいました。詩全編を載せることはできませんが、こんな学級づくりができれば、どの子も、どんな失敗にもめげることなく、教室はかけがえのない「自分の居場所」になるはずです。簡単なことではありませんが、全ての学級がそのような方向に進むように、本校職員は努めてくれていると私は信じています。

今年度、私は子どもたちに“Having a go!”「やってみようよ!」と呼びかけています。挑戦する心に火が付いてくれればと願っています。しかし、挑戦したことが成果として返ってくるとは限りません。願ったような結果に繋がらないことのほうが多いのも事実です。それでも、私は子どもたちに“Having a go!”「やってみようよ!」と呼びかけます。それは、挑戦のないところに進歩はないからです。

では、目の前のわが子がめげているなら、どう接すればよいのでしょうか。①まず、子どもの気持ちを受け止める。大人が「失敗だった」と判断せず、あくまで本人がどう感じているかに耳を傾けます。②「よくなかった。失敗した。」と本人が感じているのなら、その気持ちをまず受け止めたうえで、「どこが失敗だった?」、「どうすればよかったと思う?」、「次はどうしたらいいかな?」と、体験を次に活かすための質問を丁寧にしていきます。子どもがつらくて投げ出そうとしても、気持ちを尊重しながら、「次は必ず結果を残せる子」という前提で対話を続けことが大切です。このように対話を繰り返し、子どもに「自分がだめだから」と考えさせるのではなく、「今回はここがうまくいかなかっただけ。だから、次はこうしてみる。」と、自分で考えて解決に向かうように仕組むことが大切です。「自分の課題は、自分で解決できる」という実感は、大きな自己肯定感となり、生きる力となります。私たち大人は、子どもを丸ごと受け止められる、タフな大人で常に在りたいと思います。

詩「教室はまちがえるところだ」の中で、私は第2連の「…/神様でさえまちがう世の中/ましてこれから人間になろうと/しているぼくらがまちがったって/なにがおかしい あたりまえじゃないか」の部分が好きでしたが、子どもたちには話したことはありませんでした。私自身の未熟さを開き直っていたのだと今、感じます。開き直れる内に、多くを学んでおくべきだったと思うこの頃です。

